

家庭小説の政治学

大河内 昌

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の作品に典型的に見られるような、若い女性の恋愛と結婚を描く「家庭小説」(domestic novel) は、十八世紀～十九世紀イギリス小説の中心的ジャンルのひとつであった。また、「幸福な家庭」あるいは「家庭をまもる天使のような女性」というイメージは、イギリス小説にくり返し登場するモチーフである。とくに家庭小説と呼べない小説においても、政治的・経済的な世界では得られない幸福と安らぎを与えてくれる場所として、幸福な家庭しばしば物語の内部に描き込まれる。「幸福な家庭」というイメージは、イギリス小説に反復して登場する文学的なモチーフであり、ひとつの「トポス」と呼ぶこともできるだろう。しかし、このトポスは、たとえば E. R. クルツイウス (Ernst Robert Curtius) が研究したような中世ラテン文学におけるトポスとは異なり、とても新しく、歴史的な起源もはっきりしている。それは、十八世紀イギリスで成立した近代的な市民社会が生みだしたものである。すでに何人もの研究者たちが指摘しているように、家庭という理想の誕生と小説という文学ジャンルの勃興には深い関係がある。それらの研究のなかでもとりわけ重要なのは、ナンシー・アームストロング (Nancy Armstrong) の『欲望と家庭小説』(*Desire and Domestic Fiction*) である。¹「近代的個人は何よりもまず女性であった」(8) という有名なテーゼで始まる彼女の研究は、家庭小説の成立を、社会階級の問題と関連させて説明している。彼女は、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) の『パミラ』(*Pamela, or Virtue Rewarded*) を、家庭小説の嚆矢としてとり上げ、『パミラ』——さらにはその後の家庭小説全般——を、階級闘争の置き換えられた物語であると見ている。つまり、『パミラ』で描かれる、カントリーハウスを舞台とする、若く美しい召使の娘パミラと若い貴族 B 氏の愛と結婚をめぐる物語は、貴族階級と中産階級とのヘゲモニーをめぐる政治的な闘争のアレゴリーであり、最終的にパミラが貴族の屋敷の女主人となり幸福な家庭を築くという物語は、自由な言論と説得を武器とする中産階級の柔和な文化が、名誉と英雄的行為を重視する貴族階級の伝統的価値観に勝利することを意味しているというのである。こうした視点は、小説の勃興を中産階級の勃興——さらには中産階級に特

徹的な所有的个人主義やピューリタンの道徳性——と結びつけて論じたイアン・ワット (Ian Watt) と共通だが、女性を主人公とする家庭小説に焦点を当てることで、階級の問題に加え、ジェンダーの問題を重要な論点として浮かび上がらせたことが、ナンシー・アームストロングの大きな功績である。家庭小説を階級闘争のアレゴリーとして見ることには一定の説得力がある。だが、なぜ中産階級がジェンダー的に女性として表象されるのかという問題は、さらなる考察に価すると思われる。家庭小説における階級とジェンダーのつながりを理解するためには、十八世紀イギリス社会のいわゆる「女性化」(feminization) に関する論争、そしてその論争で焦点となった徳 (virtue) の概念に関する論争を瞥見する必要がある。じっさい、家庭小説の嚆矢とされる『パミラ』の副題が「美德の報い」(*Virtue Rewarded*) であるわけだから、徳の概念がこの作品——ひいてはジャンルとしての家庭小説——を理解する鍵となるであろうことは容易に予想される。

十八世紀における徳の問題については、J.G.A. ポーコック (J.G.A. Pocock) が重要な議論を展開している。² ポーコックによれば、十七世紀～十八世紀のイギリスにはシヴィック・ヒューマニズムという優勢な政治的思想があった。アリストテレスに起源をもち、マキアヴェリを經由してイギリスに入ってきたとされるこの思想は、商業と奢侈を排して、質実剛健な古典古代のポリスの市民の徳を近代に復活させようとする立場をとった。これを代表するのがジェームズ・ハリントン (James Harrington) と、シャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, the third Earl of Shaftesbury) やアンドリュー・マーヴェル (Andrew Marvell) らのネオ・ハリントニアンと呼ばれる人々である。彼らから見れば、商業とそれがもたらす奢侈・贅沢は社会の墮落の兆候であり、その墮落のあり様を「女々しさ」(effeminacy) と呼んで批判した。シヴィック・ヒューマニズムは、このように、起源において古典的であり、階級において貴族的であり、ジェンダー的には男性的であり、イデオロギー的には反近代・反商業の立場であるといえる。シヴィック・ヒューマニストたちによれば商業と市場経済は国家と道徳を墮落させるのである。それに対抗して商業を肯定的に考える作家・思想家たちは、商業社会を「徳」あるいは「道徳性」という観点から擁護する必要に迫られた。ダニエル・デフォー (Daniel Defoe), リチャードソン, ジョーゼフ・アディソン (Joseph Addison), リチャード・ステール (Richard Steele), デイヴィッド・ヒューム (David Hume), アダム・スミス (Adam Smith) といった作家たちが、商業と両立し、また商業によって育まれる新しい徳の概念を提示した。

彼らは、商業社会がもたらす物質的な豊かさや礼儀作法の洗練は、人々の徳を損なうどころか、むしろ新しいかたちの徳を育むことを証明しようとした。この新時代の徳は、古典教育や大土地所有と結びついた貴族的な徳ではなく、豊かな生活（奢侈）、洗練された礼儀作法、自由な討論に基づく合意形成を基盤としたものであり、それは何よりも柔和で女性的な徳であった。

ここで注目すべきことは、近代的な商業社会がジェンダー的に女性として表象されていたということである。たとえば、デフォーやアディソンが近代的な商業社会の要である公信用（public credit）を女性として表象していることは有名である。以下に引用するのは、アディソンが『スペクテイター』（*The Spectator*）誌に掲載した英国銀行を描いたドリーム・ヴィジョン仕立てのエッセイの中で公信用を描いている場面である。

Methoughts I returned to the Great Hall, where I had been the Morning before, but, to my Surprize, instead of the Company that I left there, I saw towards the upper end of the Hall, a beautiful Virgin, seated on a Throne of Gold. Her name (as they told me) was *Publick Credit*. The Walls, instead of being adorned with Pictures and Maps, were hung with many Acts of Parliament written in Golden Letters. (*Selections* 430)

（私は朝にいたイングランド銀行のグレート・ホールに戻ったようだった。しかし、驚いたことに、私が目にしたのは、私が後にしていった人たちではなく、ホールの上手の端に、金の玉座に座った乙女だった。（彼らのいうところによれば）彼女の名前は「公信用」だった。ホールの壁には、絵や地図のかわりに、金文字で書かれた議会の法案が掛けられていた。）

ここではイングランド銀行の設立によって可能となった公信用が女性として描かれている。公信用が女性として表象されることには理由がある。古典的なシヴィック・ヒューマニズムによれば、国家と政治に関する公的な世界（ポリス）が男性市民の活動の場であり、それ以外の経済的な領域（オイコス）は女性や召使の活動領域であるわけだから、経済が女性のイメージと結びつくのは不思議ではない。また、経済活動にかぎらず、商業社会がもたらす洗練された社交もすぐれて女性的なものとされた。たとえば、ヒュームは、「エッセイを書くことについて」（“Of Essay-Writing”）と題されたエッセイにおいて、洗練された会話・社交・文学を正しく理解し鑑賞する能力を女性的な能力として

描いている。

I am of Opinion, that Women, that is, Women of Sense and Education (for to such alone I address myself) are much better Judges of all polite Writing than Men of the same Degree of Understanding. . . . [M]y fair Readers may be assur'd, that all Men of Sense, who know the World, have a great Deference for their Judgment of such Books as ly [sic] within the Compass of their Knowledge, and repose more Confidence in the Delicacy of their Taste, tho' unguided by Rules, than in all the dull Labours of Pedants and Commentators. (*Essays* 536)

(女性つまり良識と教育ある女性（というのは、そうした人々にだけ向けて私は書いているからだ）は、おなじくらいの判断力をもつ男性よりもすべての文学的作品についてのほかに優れた判断者であるというのが私の意見である…世間をよく知る良識ある男性たちは、彼女たちの知識の範囲内にある書物に対する彼女たちの判断に敬意を払い、街学者と注釈者たちのすべてのつまらない仕事よりも、彼女たちの規則によらない趣味の繊細さに対して大きな信頼をおいているということを、公平なる読者諸氏は確信するであろう。)

このように、富裕化し洗練されてゆく商業社会を女性化というジェンダーの比喩で描くことが十八世紀イギリスにおいて広くおこなわれていた。もちろん、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) がいうように、十八世紀のイギリスの「女性化」が、現実社会における女性の地位向上を意味するわけではない。それは、女性を抑圧する装置が新しく洗練されたものになったということの意味するにすぎない (Eagleton 14-15)。だが、社会の大きな歴史的変化を人々が理解しようとするさいに、ジェンダーによるカテゴリー化が重要な役割を果たすということは興味深い事実である。伝統的に女性にあてがわれた領域は国家と政治という公的な領域ではなく、私的で日常的な領域であったわけだから、女性化した社会とは日常生活に対して大きな重要性を付与する社会を意味する。哲学者のチャールズ・テイラー (Charles Taylor) は、近代の特徴は国家や教会といった公共的な領域から離れた日常生活の重要性が増していったことだと指摘している (Taylor 83-100)。十八世紀には日常生活をいかにおくのかということが人々の関心となり、日常生活を描くことを使命とする小説やエッセイ、あるいは日常生活における振

る舞いや礼儀作法の指南書である「コンダクトブック」といった新しいジャンルの書物が登場した。だが、公的な領域に対立するものとしての私的な領域——日常生活と呼ばれる領域——は、さらに商業活動と家庭生活という二つの領域——いくなれば、ロビンソン・クルーソーの世界とパミラの世界——から構成される。そして、この二つの領域における徳もしくは倫理的行動の基準はかなり違うように見える。

本論が提起する問題は、家庭小説が表現する女性的徳——パミラが体現する「徳」——は、商業活動もしくは市場経済とどのような関係をもつのか、ということである。ワット以来、小説というジャンルは中産階級と資本主義の勃興と関係づけられてきた。たえず新しいプロジェクトにとり組み、自分の財産や利得を計算しながら増やしてゆくロビンソン・クルーソーのような人物像は、近代的経済人の原型として理解されてきた。しかし、パミラに見られる女性的な徳は、経済的な利益獲得を目的とする市場経済の論理とまったく相容れないように見える。パミラの行動指針は自らの女性的な徳もしくは貞節をまもることであって、彼女はそれを利益（interest）と交換することを徹底して拒否する。たとえば、パミラに惚れ込んだB氏は、パミラを愛人とするためにさまざまな交換条件を文書として提示する。B氏がつくる提案書は、彼が近代的な契約という慣行にすでに馴染んでいることを示す例として考えれば興味深いのが、パミラは断固としてそれを拒否するのである。

As to your second proposal, I reject it with all my soul. Money, sir, is not my chief good: may God Almighty desert me, whenever I make it so; and whenever, for the sake of that, I can give up my title to that blessed hope which will stand me instead, at a time when millions of gold will not purchase one happy reflection on a past mis-spent life! (*Pamela* 228)

（第二の提案に関しては、断固お断り申し上げます。お金は私の主たる幸せではありません。もしそうなったら、また、お金のために、私を支えている祝福への希望を受け取る資格を捨て去るなら、神様、私をお見捨ててください。莫大な財産があっても、過去の過ちを悔いることになれば、ほんのひと時の幸福も手に入れることはできなくなるでしょうから。）

ここで彼女が拒否しているのは、自分の女性的魅力に交換価値を設定して商品として売

ることである。周知のように、パミラは自らを商品化することを徹底して拒絶することで、結果的にB氏の正妻としての地位を手に入れ、理想的家庭婦人の鑑となる。こうした行動原則に見られるように、パミラが中産階級的な禁欲主義を体現する人物像であることはまちがいないが、彼女の禁欲的な道德意識と商業社会あるいは市場経済との関係は明白ではない。そこには何か捻じれた逆説的な関係がある。その逆説にこそ、家庭小説のもつ政治性・イデオロギー性を解き明かす鍵がある

家庭的な女性と市場経済の関係を考察する一助として、家庭的な女性ではない同時代の女性像を分析することが有効であるように思われる。ここでは、デフォーの『モル・フランダーズ』(*Moll Flanders*)の女性主人公モル・フランダーズをとり上げて、パミラと比較してみたい。まったく共通点のないように見える二人の女性だが、じつは、モルとパミラが物語の中でおかれる境遇は驚くほどよく似ている。彼女たちは、若く美しく才能豊かで女性的な魅力を溢れるほどもちながら、しかし財産も家柄も後援者ももたない女性として裕福な家庭に住み、その家の若い息子たちに誘惑される。有力な後援者ももたない彼女たちは個人として判断し、事態に対処しなければならない。そして、周知のように彼女たちは正反対の決定を下すのである。

ニューゲートの監獄で生まれたモルは、偶然の成りゆきから裕福な家庭に引きとられるが、美しく成人したモルはその家の長男から誘惑される。モルは彼の熱烈な愛の言葉と彼が与えてくれる金貨に目がくらんで、長男に自分の身をまかせる。過去を回想する語り手としてのモルは、そのさいの自分の判断のまちがいについてつぎのように語る。

My Colour came, and went, at the Sight of the Purse, and with the fire of his Proposal together ; so that I could not say a Word, and he easily perceiv'd it ; so putting the Purse into my Bosom, I made no more Resistance to him, but let him do just what he pleas'd ; and as often as he pleas'd ; and thus I finish'd my own Destruction at once, for from this Day, being forsaken of my Vertue, and my Modesty, I had nothing of Value left to recommend me, either to God's Blessing, or Man's Assistance. (*Moll Flanders* 25)

(財布を見て、そして彼の火のように熱い求愛を受けて、私の顔色はくるくると変わりました。そして、言葉も出なくなりました。彼はそれをすぐに見て取りました。財布を胸に抱いて、抵抗をせず、彼に好きなことを、好きなだけさせたのです。こうして、私は自分の破滅の仕上げをしました。この日から、自分の徳と慎みを捨て

去ったことで、私は神の祝福や人の助けに値するだけの価値を失ってしまったのです。)

この誘惑の場面にあからさまに貨幣が介在するということは象徴的である。モルは自分を誘惑する長男が与えてくれる金貨に目がくらんで、自分の身を相手にまかせる。しかし、彼女はその場面を回想して、自分の身体を貨幣と交換したことで、結果的に自分の価値を失ったという。この場面で「徳」という言葉とともに「価値」(Value)という言葉が用いられていることは意味深長である。金貨に目がくらんで判断力を失い、相手に身をまかせたということは、自らを商品化したことを意味する。一般的な商品は、交換過程に乗ることによってはじめて商品になる、つまり交換価値を付与される。しかし、逆説的なことに、この女性という商品は、貨幣と交換することで「価値」を失うのである。ここでモルのいう価値とは一般的な商品がもつ交換価値とは異なる何かであり、商品化することで消滅するような価値である。

だが、女性もしくは女性的なものがもつ「価値」は商品交換の論理とまったく無関係なわけではない。むしろ女性は特殊な商品なのである。モルは自分のまちがいについて、つぎのようにいう。

THUS I gave up myself to a readiness of being ruined without the least concern, and am a fair *Memento* to all young Women, whose Vanity prevails over their Vertue : Nothing was ever so stupid on both Sides, had I acted as became me, and resisted as Vertue and Honour requir'd ; this Gentleman had either Desisted his Attacks, finding no room to expect the Accomplishment of his Design, or had made fair, and honourable Proposals of Marriage ; in which Case, whoever had blame'd him, no Body could have blam'd me.
(*Moll Flanders* 22)

(こうして私は自ら進んで、たいした考えもなしに、破滅に身をゆだねたのです。私は、虚栄心が徳を圧倒している若い女性への教訓となるでしょう。私たちは両方ともこの上なく愚かでした。もし私が自分に相応しく振舞い、徳と名誉が要求する抵抗をしていたら、この紳士はたくらみを遂行する余地がないことを知っていい寄ってくることをやめるか、もしくは公正で名誉ある結婚の申し込みをしたでしょう。そうなれば、彼を責める人はあっても、だれも私を責めることはなかったでしょう。

う。)

徳と慎みに相応しい振る舞いをして、貞操を守りとおせば、最終的には正式な妻の座という最大の報酬（美徳の報い）をえることができたかもしれないというこの一節は、彼女よりも賢明に行動したパミラの成功例を想起させる。女性は自らの交換価値を徹底して拒絶することで、最大の「価値」を獲得するのである。このことは、パミラがよく理解していることである。

話を『パミラ』にもどすと、上で見たように、パミラは自分を財産と交換する契約を拒否し、さらに、契約が成立した十二か月後に正式に妻とするかどうかを判断するという項目についても、つぎのようにはっきりと拒絶する。

Give me leave to say, in answer to what you hint, that you may, in a twelvemonth's time, marry me, if you shall be satisfied with my good behaviour ; that *this* weighs less with me, if possible, than any thing else you have said. For, in the first place, there is an end of all merit, and all good behaviour, on my side (if I have *now* any) the moment I consent to your proposals. And I shall be so far from *expecting* such an honour, that I will pronounce, that I should be most *unworthy* of it. What, sir, would the world say, were you to marry your harlot ? That a man of your rank, should stoop, not only to marry the low-born Pamela, but to marry a low-born prostitute ? (*Pamela* 230-231)

(もし、私のよい振る舞いに満足したなら十二ヵ月以内に私と結婚するかもしれないというご提案に対するお答えとしていわせていただきます。それは、その他のお申し出以上に、私にとって何の意味もありません。なぜなら、第一に、そのご提案に従った瞬間に、私の美点やよい振る舞いのすべて（かりにそんなものがあるとしてですが）が、意味を失うからです。私は、そうした名誉——いわせていただけるなら、私はそれを受けるのに相応しくはありませんが——を最も期待できない者となるのです。ご主人様、何と、売春婦と結婚するのか？と世間はいうでしょう。ご主人様のようなご身分の方がパミラのような生まれの卑しい者と結婚するまでに身を落とすというだけではありません。生まれの卑しい売春婦と結婚することになるのです。)

くり返すが、パミラはまるでモルの助言にしたがって行動しているかのようである。ひとたび自分の身と引き換えに金銭的な報酬を受け取るなら——つまり、自らに交換価値を設定するなら——、そのことによって女性としての「価値」がなくなってしまうのであり、逆に、交換価値を拒否することによって最大限の「価値」が生ずるという逆説がここにも見られる。ここでも、徳の価値は、交換価値もしくは商品価値とまったく相容れないカテゴリーとして想定されているように見える。³

最終的に、パミラの手紙と日記を読んだB氏はパミラのもつ内面的な徳を認識し、パミラを正式に妻とするわけだが、重要なのは、パミラがB氏と結婚するのは、それによって物質的な利益をえるためではないということである。つまり、自分自身に設定した交換価値と引き換えに貴族の正妻としての地位を手に入れるわけではない。それはパミラの自発的な愛 (love) に基づく行為であり、損得勘定とはまったくべつの動機づけによっておこなわれる行為なのである。パミラの判断と行為を正当化するのには愛である。彼女はいう。

For, O my dear parents, forgive me ! but I found, to my grief, before, that my heart was too partial in his favour ; but *now*, to find him capable of so much openness, so much affection, nay, and of so much *honour* too, I am quite over-come. This was a good fortune, however, I had no reason to expect. But to be sure, I must own to you, that, I shall never be able to think of any body in the world but him ! Presumption ! you will say ; and so it is : but love, I imagine, is not a voluntary thing—*Love*, did I say ! But come, I hope not : at least it is not, I hope, gone so far, as to make me *very* uneasy : for I know not *how* it came, nor *when* it began ; but it has crept, crept, like a thief, upon me ; and before I knew what was the matter, it looked *like* love. (*Pamela* 283)

(親愛なるご両親様、お許しください。私は、悲しいことに、ご主人様をとてもお慕いしていることに気づいたのです。あれほど率直に、愛情豊かに、ご立派になれることを知って、私は打ちのめされたのです。しかし、これは期待する理由のなかった幸運です。でも、たしかに、ご主人様以外のだれも考えることができないと告白しなければなりません。思い上がり、とおっしゃるでしょうし、そのとおりです。しかし、思うに、愛は意のままになるものではありません。愛がやって来たといいました。でも、私が落ち着きをなくすほどにはならないといいと思います。という

のも、愛はどのように来たのか、いつ始まったかが分からず、それは、盗人のように私に忍び寄り、何ごとかわからないうちに、愛の姿をとったのです。）

ここからわかるのは、家庭という新しい空間が形成されるさいに鍵となるのは愛と、その愛にのみ基づいた結婚だということである。パミラは結局、自分に対してレイプまがいの行為を働いた無礼な B 氏と結婚するが、それは結婚による身分上昇や財産の獲得を目的とするものではなく、純粋な愛に基づく行動なのだ（少なくとも、パミラ本人はそう主張している）。損得勘定をまったくふくまない、純粋に愛のみに基づく結婚によってはじめて、市場経済の論理とは無縁な女性的な徳によって支配される場所としての家庭という領域が成立する。

比較のために、もう一度、『モル・フランダーズ』に描かれている結婚観を見ることにする。自分の結婚相手を探すモルは、財産をもたないために、ロンドンの結婚市場で不利な立場におかれている状況を以下のように描写する。

THIS Knowledge I soon learnt by Experience, (*viz.*) That the Sate of things was altered, as to Matrimony, and that I was not to expect at *London*, what I had found in the Country, that Marriages were here the Consequences of politick Schemes, for forming Interests, and carrying on Business, and that Love had no Share, or but very little in the Matter.

That, as my Sister in Law, at *Colchester* had said ; Beauty, Wit, Manners, Sence, good Humour, good Behaviour, Education, Vertue, Piety, or any other Qualification, whether of Body or Mind, had no power to recommend : That Money only made a Woman agreeable. (*Moll Flanders* 57)

（私は経験からつぎのことを学びました。つまり、結婚に関して状況が変化していたのです。田舎で知ったことはロンドンでは通用しなかったのです。結婚は利益を生み、ビジネスをおこなうための政治的計略の結果であって、愛はまったくあるいはほとんど関係がなかったのです。）

コルチェスターの義姉がいったように、美しさ、機知、分別、性格のよさ、よい振る舞い、教育、徳、信仰その他の性質は、身体に関するものであれ心に関するものであれ、女性を望ましいものにはしなかったのです。お金だけが女を望ましいものにしたのです。）

ここでモルは、結婚を完全に取引という観点から分析し、分別や徳や信仰といった女性の内面的な価値は、結婚市場において「交換価値」をもたないと嘆いている。だが、十八世紀の家庭小説においては、モルのように結婚を交換価値という観点から見る女性には幸福な結婚という報酬は与えられない。『パミラ』をはじめとする家庭小説のジャンルの目的は、女性の内面的な徳が支配原理となるような家庭という領域を近代の市民社会の中に創造することだった。だが、家庭空間は女性的な徳を商品化することでは決して手に入れることはできないのである。パミラはまさに、自らの身体を商品化することを徹底して拒否することで、市場原理から自由な家庭空間を切り開いたのである。⁴

家庭空間の創造の鍵は愛という感情である。愛は——パミラやその他の家庭小説の女性主人公たちの言葉を信じるなら——随意的に操作されえないものであり、それゆえに、彼女たちの結婚が合理的な功利計算とはまったく無縁で純粹なものであるということが保証される。したがって、愛はイデオロギー的に大きな意味をもつことになり、平凡な若い女性の内面に宿る愛という感情を記述し分析することが、それまでの文学では考えられないほど、文化的・政治的に重要な企画となったのである。そして、家庭小説という文学ジャンルは、若い女性主人公の心理もしくは内面に焦点を当てることによって、まったくもって不随意的である愛が若い女性の胸中に生まれ、育ってゆく不可思議なプロセスを描くことを自らの使命とする。この愛という不随意的な感情の微妙な生成過程は『パミラ』の中で周到に描かれる。上の引用で、パミラは自分がB氏をいつの間にか愛し始めていたことを告白しているが、その愛は突然に生じるわけではない。パミラのB氏に対する感情は、彼女が軟禁状態におかれている間にも微妙に変化してゆく。たとえば、B氏が危険な目にあったが無事だったという話を聞くと、パミラはうれしく思う。

Just now we heard, that he had like to have been drowned in crossing a stream, a few days ago, in pursuing his game. What is the matter, that, with all his ill usage of me, I cannot hate him? To be sure, in this, I am not like other people! He has certainly done enough to make me hate him; but yet when I heard his danger, which was very great, I could not in my heart forbear rejoicing for his safety; though his death would have set me free. (*Pamela* 218)

(今しがた聞いたことだが、数日前、狩の獲物を追って川を渡ろうとしたさいに、

ご主人様は溺れかけたそうだ。なんということだろう、彼のひどいあつかいにもかかわらず、私をご主人様を嫌いになれないとは。きっと私は他の人たちと違うのだろう。彼は嫌いになっていいほどに、酷いことをしている。けれども、彼が陥ったとても大きな危険のことを聞くと、彼が助かったことを喜ばずにはいられない。ご主人様が亡くなれば、私は自由になれるというのに。）

また、パミラはB氏の姿を見ると、魅力的な男性であると感じてしまう。そして、パミラ自身、そうした自分の気もちの変化を説明できないのである。

I looked after him out of the window, and he was charmingly dressed : to be sure, he is a handsome, fine gentleman : what pity his heart is not so good as his appearance ! Why can't I hate him ? But don't be uneasy, if you should see this, for it is impossible I should love him, for his vices all *ugly him over*, as I may say. (*Pamela* 235)

（私は窓の外のご主人様の姿を目で追いました。素敵なお服装をしていました。たしかに美男子ですばらしい紳士です。その見かけほどご立派でないのは残念なことです。なぜ私は彼を嫌いになれないのだろう。でも、それを知っても不安になる必要はありません。私が彼を愛することはありえませんが。いってみれば、彼の悪徳が彼全体を醜くしているのです。）

これらの部分では、自分を虐待するB氏をどうしても憎むことができず、むしろ彼に魅力を感じてしまうパミラの気もちの揺れが描かれている。これはB氏に対する愛の芽生えである。重要なのは、パミラ自身が自分の感情を理解できていないということである。愛は本人も気づかないうちに芽生え、成長し、いつの間にか本人を支配する。愛が意識的にコントロールすることができないものであるなら、それが功利的な計算から生じることはありえない。それは理性的な利益獲得とはまったく別種の、純粋で没利害的（disinterested）なものである。愛は不随意的なものであるというまさにこの事実こそが、家庭小説の女性主人公たちの行動原理を市場経済の原理から切り離す。家庭小説の使命とは、若い女性の胸中で本人が知らない間に成長する愛という神秘的な感情のかたちとその生成過程を描くことなのである。⁵

こうして、すべてを商品化してゆく無慈悲な市場経済と区別された空間、すなわち損

得勘定抜きの愛が支配する「親密な領域」としての家庭という領域が立ち現れる。家庭と市場経済の切り離しには大きなものが賭けられている。だが、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) が指摘しているように、商品化を拒否することで立ち上がってくる家庭という領域は、それをとり囲む市場経済と無関係ではありえない。家庭は、市民が帰る場所あるいは市民を産み育てる場所として、政治的・経済的領域とともに市民社会を構成する二つの場所なのである。⁶ だが、この二つをべつな領域として想像することに、市民社会の成立の可能性がかかっているのである。ハーバーマスは家庭という「親密な領域」についてつぎのようにいう。

This space was the scene of a psychological emancipation that corresponded to the political-economic one. Although there may have been a desire to perceive the sphere of the family circle as independent, as cut off from all connection with society, and as the domain of pure humanity, it was, of course, dependent on the sphere of labor and commodity exchange. . . . Thus it was a private autonomy denying its economic origins (i.e., an autonomy *outside* the domain of the only one practiced by the market participant who believed himself autonomous) that provided the bourgeois family with its consciousness of itself. (Habermas 46)

(この空間は、政治・経済的な空間に対立する心理的な解放の場であった。家族の領域を独立し、すべての社会的関係性から切り離されたものと見なしたい、あるいは純粋な人間性の領域と見なしたいという欲望があったかもしれないが、家族の領域はもちろん労働と商品交換の領域に依存しているのだ…こうして、経済的起源を否定する私的なものの自律性(つまり、自分を自律的と信じる市場のプレイヤーの行動領域の外部に存在する自律性)こそが、ブルジョア家族に自意識を与えたのである。)

家庭という領域は、近代的市民の道徳的な自律を支えるものなのである。マックス・ヴェーバー (Max Weber) が指摘しているように、資本主義とは禁欲的なまでの宗教的倫理観が生みだしたものであり、市場経済に参加する市民の道徳性を前提としている。市場のプレイヤーが有徳であるという前提こそ、信用に基づく近代的な市場経済を可能とする条件にほかならない。市場はすべてを無慈悲なまでに商品化してゆくメカニズム

をもっているが、そこに参加する市民が倫理観を忘れた利益の追求に終始すれば、市場自体が立ちゆかなくなるということは、資本主義の初期段階の解説者たちも知っていたことである。それは、なぜ、アダム・スミスが『諸国民の富』（*The Wealth of Nations*）とともに、『道徳感情論』（*The Theory of Moral Sentiments*）という道徳哲学に関する書物を書かなければならなかったのかという問題と直結する。

市場に参加する市民は倫理的な存在でなければならないが、そうした倫理観をもった市民を育てる場所こそが家庭である。家庭という領域なしに近代的な商業社会は成立しない。家庭を支配するのは女性的な徳であり、女性的な徳は表面的には市場経済の原理に抵抗するが、同時に市場経済を下支えしているのである。家庭と市場経済のこうした関係は複雑である。家庭はあからさまな市場経済の原理に支配されてはならない。（それゆえ、自らを商品化し、市場の論理に身をまかせる女性は「売女」（whore）として忌み嫌われるのである）。市場経済を拒絶する禁欲的な女性的原理によって、市場経済における健全なプレイヤーが育成される。パミラとモル・フランダーズの徳あるいは倫理観に大きな差をもたらした要因として、パミラは貧しいが信仰深い両親から厳格な教育を受けたのに対し、孤児のモル・フランダーズはついに理想的な家庭での教育を受けなかったという事実をあげることは可能だろう。それゆえ、近代的市民社会は、女性が市場のプレイヤーとなることに対して警戒感をもつのである。逆に、若い女性は市場における損得勘定とは無縁であることによって信頼をえる。パミラに代表される家庭小説の女性主人公たちの多くが財産に無関心であるのはそうした理由からである。彼女たちはとくに財産をもつ必要はなく、財産が邪魔になることさえある。たとえば、ジェイン・オースティンの女性主人公たちの何人かは財産らしい財産をもたない。『分別と多感』（*Sense and Sensibility*）のダッシュウッド姉妹、『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*）のエリザベス・ベネット、『ノーサンガー・アビー』（*Northanger Abbey*）のキャサリン・モerlandたちは、十分な財産をもたないという理由で、結婚市場において不利な立場におかれるように見える。しかし、物語の中ではむしろ、彼女たちは財産をもたないからこそ、女性的な徳を代表する存在として理想的で望ましい女性となる。逆に、祖父から大きな財産を遺贈されたりチャードソンの『クラリッサ』（*Clarissa*）の女性主人公クラリッサは、そのために家庭から排除される。また、ファニー・バーニー（Fanny Burney）の『カミラ』（*Camilla*）の女性主人公カミラが幸福な結婚に到達するまでに、彼女が相続した莫大な遺産をつぎつぎと剥ぎとられてしまうこと——つまり、幸せな結婚をするた

めには文字通り裸一貫にならなければならなかったこと——は、そうした事情と関連していると思われる。また、そうした理想的な女性主人公に対立する人物として、自分の女性的な魅力を利用して有利に結婚しようとする狡猾な女性が描かれることがあるが、そうした女性たちは忌み嫌われる。たとえば、『分別と多感』のルーシー・スティールや『ノーサンガー・アビー』のイザベラ・ソープなどがそうした例である。彼女たちが嫌われるのは、自分をあからさまに結婚市場での商品とする彼女たちが、自分の胸中に自然発露的に生まれる愛に身をまかせることなく、有利な結果を求めて理性的かつ功利的な行動をするからである。

もちろん、没利害的な愛に忠実な女性と功利計算に基づいて行動する女性を外形的に区別するのは難しいという問題はあるし、その区別が曖昧になる危険はつねに存在する。その曖昧さは、女性主人公の動機に対する疑念を生み出す場合がある。たとえば、パミラの動機はじつは不純なものではないのかという疑念は、出版直後からくり返し表明されてきた。⁷ たとえば、ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) の作とされる『パミラ』のパロディー作品『シャミラ』(Shamela) においては、女性主人公である小間使パミラことシャミラは、自分の貞節を売り物にし、手練手管を用いて自分に惚れ込んだ青年貴族ブービー氏とまんまと結婚する。だが、じつはシャミラは結婚前にすでに牧師ウィリアムズの愛人であり、貴族の正妻となった後でも牧師ウィリアムズと愛人関係を続けるのである。『シャミラ』においても、若主人ブービー氏はシャミラに対して気前のいい条件を提示し、自分の愛人になるように提案するが、シャミラは徳を守るという口実で彼を焦らす。だが、徳を大切にする貞淑な乙女という見せかけの下で、彼女はブービー氏の正妻の地位を手に入れることを計算高く目論むのである。

Next Morning early my mater sent for me, and after kissing me, gave a Paper into my Hand which he bid me read ; I did so, and found it to be a Proposal for settling 250 *l.* a Year on me, besides several other advantageous Offers, as Presents of Money and other Things. Well, *Pamela*, said he, what Answer do you make me to this. Sir, said I, I value my Vartue more than all the World, and I had rather be the poorest Man's Wife, than the richest Man's Whore. You are a Simpleton, said he ; That may be, and yet I may have as much Wit as some Folks, cry'd I ; meaning me, I suppose, said he ; every Man knows himself best, says I. Hussy, says he, get out of the Room, and let me see

your saucy Face no more, for I find I am in more Danger than you are, and therefore it shall be my Business to avoid you as much as I can ; and it shall be mine, thinks I, at every turn to throw my self in your Way. So I went out, and as I parted, I heard him sigh and say he was bewitched.

Mrs. *Jewkes* hath been with me since, and she assures me she is convinced I shall shortly be Mistress of the Family, and she really behaves to me, as if she already thought me so. I am resolved now to aim at it. I thought once of making a little Fortune by my Person. I now intend to make a great one by my Vartue. (*Shamela* 341-342)

（翌朝、ご主人様は私を呼びだし、私にキスし、私に書付を渡してそれを読むようにいった。私はそれを読んだ。それは、お金や物品といった私に有利なくつかの贈物に加えて、年収250ポンドの財産を与えるという提案であった。彼はいった。「さあ、パミラ、この提案に対してお前はどうか答えるのだ。」私はいった。「ご主人様、私は全世界よりも自分の徳を大事にしています。大金持ちの情婦になるくらいなら、ひどく貧乏な男の妻になります。」「お前は馬鹿だ」と彼はいった。「そうかもしれませんが、私はだれかさんとおなじくらいの知恵はもっています」と私は叫んだ。「私のことを知っているのだな」と彼はいった。「だれでも、自分のことは自分がいちばんよく知っています」と私。「あばずれ女め、この部屋から出てゆけ。その仏頂面を二度と見せるな。私はお前よりももっと大きな危険にさらされている。だから、できるだけお前を避けなければならない。」「では、私はできるだけあなたに出会うようにしましょう」と私は考えた。こうして私は部屋をでたが、わかれぎわに彼がため息をついて「私は魅せられてしまった」というのが聞こえた。

それからジュークスさんが私と一緒にいたが、彼女は、私がきつとこの家の女主人になるといい、あたかも私がすでに女主人であるかのように振る舞った。私はそれを狙うことに決心した。私は自分の体を使ってちょっとした財産つくることを考えていた。私は今や自分の徳を利用して大きな財産をつくるつもりだ。）

『シャミラ』は『パミラ』の悪意をもったパロディーであるが、じっさい、パミラは召使時代から家政という意味でのエコノミーに優れた能力を発揮している。その彼女が自らの利得の計算という意味でのエコノミーにまったく無関心ということは考えにくい。もしかするとパミラは計算高く狡猾で抜け目のない女性なのかもしれない。『シャミラ』

はそうした疑いを表明している。それは、『高慢と偏見』のエリザベス・ベネットがダーシー氏との結婚を望んだのは、ダーシー氏の領地ペンバリーの女主人になりたいという欲得ずくの計算が働いたからかもしれないという疑いに直結する。家政＝経済（economy）を自らの行動原理とするという点で、モルとパミラは姉妹なのかもしれないし、シャミラは彼女たちの三人目の姉妹であるのかもしれない。あるいはカマトトぶったキャサリン・モーランドはじつはイザベラ・ソープと五十歩百歩の同類なのかもしれない。

もちろん、重要なことは、こうした問題に結論をだすことではなく、不随意的に生まれる愛の描写と分析に家庭小説が多大な労力を費やしてきたという文化史的な事実である。没利害的な愛に基づく結婚と、功利的な計算に基づく結婚は、外形的に区別することはもともと困難である。だからこそ、家庭小説は、若い女性の胸中に愛が芽生え成長する過程を、緻密に、説得力豊かに描かなければならないのである。たしかに、ルネサンスのソネット作者たちも貴婦人たちの心の不可解さについての思索をテキスト化した。しかし、その表現は心理描写というにはあまりに定型的であったし、その彼らにしても貴婦人に仕える小間使の心の中を覗き込むなどということは、およそ考えもつかなかった。けっして身分の低い若い娘の心理を描写するのに、これほどまでに膨大なページ数を費やすというのは、家庭小説が西洋の文学史において最初に始めたことであった。それは近代の市民社会において、若い女性の胸中に宿る不随意的で没利害的な愛というものに大きなイデオロギー的意味が付与されたからである。上で述べたように、若い女性の愛こそが家庭を市場経済から切り離す原動力である。もしそうだとすれば、平凡な娘の胸中に宿る愛こそ、近代の市民社会の存立を可能にする条件であり、それを説得力豊かに描く家庭小説に託されたイデオロギー的的使命は、非常に大きなものであった。もちろん、家庭小説に先立ってそうした愛という感情が存在していたと考える必要はない。家庭小説という言説が、没利害的で純粋な愛という概念を作りだしたのだと考えるほうが自然かもしれない。しかし、家庭という親密な領域と経済活動の領域が不可分であり、背後でつながっているからこそ、多くの家庭小説に見られるように、社会的・経済的な分野での解決不可能な葛藤が、家庭や家族の問題に翻訳されて、象徴的解決が与えられるという戦略が可能となるのである。この象徴的解決がイデオロギー的な効力をもつのは、市場経済と家庭が、じつはおなじもの——近代的市民社会——の二つの側面であるからにはほかならない。

注

1. 家庭小説の研究としては Armstrong 以外にも、Bannet; Flint; McKeon; Thompson などがあるが、なかでは McKeon の *Secret History of Domesticity* が重要である。本論は McKeon の議論に負う部分が多い。
2. Pocock の議論では、とくに *The Machiavellian Moment* と *Virtue, Commerce, and History* が重要。また、Hont and Ignatieff の論集の中の“Cambridge Paradigm and Scottish Philosophers”も参照。
3. このロジックは、リチャードソンのつぎの作品『クラリッサ』において、クラリッサがラヴレイスに陵辱された後では、彼女がラヴレイスと結婚する可能性がまったく消えてしまうという文脈で再び登場する。
4. 『モル・フランダーズ』という小説は、市場経済の中に裸一貫で投げ出された個人がどう振る舞うのかという思考実験であるという点で『ロビンソン・クルーソー』と類似の作品であり、主人公のジェンダーが女性に変えられている点だけが異なっている、ということもできる。女性としての徳を失い、市場原理を体現するようになったモルは、かりに自分でいうように「いい妻になることができる」性質を備えた女性であったとしても、家庭的な幸福を手に入れることは許されないのである。
5. パミラやクラリッサといった家庭小説の主人公たちは、それまでの文学史上に類を見ないほど豊かな心理的内面性が付与される。そうした内面性は、リチャードソンにおいては書簡体というレトリックによって生み出される。読者を女性登場人物の心理の内部に引き込むオースティンの自由間接話法はそのもっとも精緻なもうひとつの形態である。
6. 先にあげた古典的なシヴィック・ヒューマニズムの考え方によれば、古典古代の徳はポリスに対する奉仕、すなわち公共善に対する奉仕に基づくものであって、オイコスつまり経済活動の領域と対立するものである。経済活動もしくは家事労働という意味でのオイコスは奴隷・召使・女性や子供が住まう領域なのである。そう考えると、市場における経済活動も家庭の管理も、エコノミーという私的な領域がもつ二つの側面であって、不即不離なものである。市場はそこに参加する独立した主体——法的かつ倫理的な主体——なしには存在しない。倫理的・道徳的な主体を育て育む家庭は、市場から独立していると同時に、市場を下支えし、市場に存在する倫理性を担保する場所である。非人間的な競争原理によって支配され、すべてを商品化の原理で覆い尽くすかに見える市場経済と、利益と競争から自由な家族的情愛が支配する家庭は、近代市民社会を構成する不可分な構成要素なのである。
7. 『パミラ』の女性主人公パミラの動機にまつわる論争に関しては、Keymer and Sabor を参照。

参 考 文 献

- Armstrong, Nancy. *Desire and Domestic Fiction: A Political History of the Novel*. New York: Oxford UP, 1987.
- Bannet, Eve Tavor. *The Domestic Revolution: Enlightenment Feminism and the Novel*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2000.
- Clery, E.J. *The Feminization Debate in Eighteenth-Century England: Literature, Commerce and Luxury*. New York: Palgrave, 2004.
- Curtius, Ernst Robert. *European Literature and the Latin Middle Ages*. Trans. Willard R. Trask. Princeton UP, 1981.
- Defoe, Daniel. *Moll Flanders*. Ed. G.A. Starr & Linda Bree. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Eagleton, Terry. *The Rape of Clarissa: Writing, Sexuality and Class Struggle in Samuel Richardson*. Oxford: Basil Blackwell, 1982.

- Fielding, Henry. *Joseph Andrew and Shamela*. Ed. Douglas Brooks-Davies. Oxford : Oxford UP, 1980.
- Flint, Christopher. *Family Fictions : Narrative and Domestic Relations in Britain, 1688-1798*. Stanford : Stanford UP, 1998.
- Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere : An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Trans. Thomas Burger & Frederick Lawrence. Cambridge, Mass. : MIT P, 1998.
- Hume, David. *Essays : Moral, Political and Literary*. Ed. Eugene F. Miller. Indianapolis : Liberty Fund, 1987.
- Keymer, Thomas and Peter Sabor. *Pamela in the Market Place : Literary Controversy and Print Culture in Eighteenth-Century Britain and Ireland*. Cambridge : Cambridge UP, 2005.
- Mckee, Michael. *The Secret History of Domesticity : Public, Private, and the Division of Knowledge*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 2005.
- Pocock, J.G.A. *The Machiavellian Moment : Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*. Princeton : Princeton UP, 1975.
- . “Cambridge Paradigm and Scottish Philosophers : A Study of the Relations between the Civic Humanist and the Civil Jurisprudential Interpretation of Eighteenth-Century Social Thought.” Istvan Hont and Michael Ignatieff, ed. *Wealth and Virtue : The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*. Cambridge : Cambridge UP, 1983. 235-252.
- . *Virtue, Commerce, and History : Essays on Political Thought and History, Chiefly in the Eighteenth Century*. Cambridge : Cambridge UP, 1985.
- Richardson, Samuel. *Pamela, or Virtue Rewarded*. Ed. Margaret A. Doody. Harmondsworth : Penguin, 1980.
- Ross, Angus, ed. *Selections from The Tatler and The Spectator of Steele and Addison*. Harmondsworth : Penguin, 1982.
- Taylor, Charles. *Modern Social Imaginaries*. Durham : Duke UP, 2004.
- Thompson, Helen. *Ingenuous Subjection : Compliance and Power in the Eighteenth-Century Domestic Novel*. Philadelphia : U of Pennsylvania P, 2005.
- Watt, Ian. *The Rise of the Novel : Studies in Defoe, Richardson and Fielding*. London : Catto & Windos, 1957.
- Weber, Max. *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Trans. Talcott Parsons. 1930. London : Routledge, 1992.

The Politics of the Domestic Novel

Sho OKOCHI

The domestic novel in eighteenth-century Britain tells the story of the love and courtship of a socially insignificant young woman, describing the process in which the affection of love originates, grows and ripens in her heart ; this, in fact, was an unprecedented phenomenon in the history of Western literature. This genre prospered in the period because, I would urge, young women's love had become a politically and ideologically charged issue. This paper explores the politics of the domestic novel by analyzing the ideological and cultural implications of young women's love, with reference to Samuel Richardson's *Pamela* and Daniel Defoe's *Moll Flanders*. The domestic space created by the heroine's marriage is a place governed by her female virtue, which is supposed to have no connection with the pitiless and competitive principle of the marketplace outside the family. As a critic like Jürgen Habermas has pointed out, however, the private sphere of family, as the locus where citizens as players in the marketplace are reproduced and nurtured, is really complicit with the modern capitalist system. The domestic sphere is an integral part of modern civil society because it is supposed to guarantee the moral character of modern commercial society ; female virtue is expected to refine the manners and behavior of modern citizens. What must be emphasized here is that it is the feeling of "love" conceived in the breast of young heroines that makes feasible the "disinterestedness" of their virtue. In this genre of novels, the motive of the heroine's marriage is never found in her practical calculation but in the love that is born spontaneously in her heart. Her love, importantly, is described as an involuntary feeling that grows in spite of herself and is not kept under her own control. It is the involuntariness of love that guarantees the sincerity and virtuousness of her behavior. The task of domestic novels is to describe the psychological process of love's growth because love in the breast of the young heroine assumes enormous ideological importance as the mainstay of modern civil society.